

進行 浅田

記録 若林

- 議 題 平成25年度 第3学校協議会
- 開催日時 平成26年3月15日(土)
- 開催場所 本校 応接室
- 出席者 [委員] 柿原勝彦 委員 澤田 裕 委員 芝井敬司 委員 宮坂政宏 委員
[学校] 平野裕一(校長) 浅田和也(教頭) 小梶芳忠(事務長)
山本尚(首席・学習指導室長) 奥谷彰男(首席・生活指導室長)
若林伸治(学年室長)
- 資料 「槻の木の新たな“強み”を創造するために③」

1. 澤田協議会長あいさつ
2. 平野校長あいさつ
3. 学校からの報告 山本首席「槻の木の新たな“強み”を創造するために③」
4. 質疑応答・意見交換

【宮坂委員】学校教育自己診断結果の報告があったが、各設問のポイントの高低そのものより、その値がもつ意味を考えるべき。高い値を示した項目でも、逆に課題を含んでいることがある。2年次生の結果については、教員と生徒とのコミュニケーションの課題、例えば、生徒にとって先生の態度がどのように見えているのか、相談したいときにどう対応しているのかなど先生と生徒との「壁」というか「敷居」との因果関係がどうであったのかが気になる。先生の結果でも、教員のカウンセリングマインドや生徒と話す機会や教員間で話す機会の項目が低い。他に及ぼす悪い影響があるのかどうか気を付けていただきたい。一方で、教師間のコミュニケーションが少ないが、互いにリスペクトしているとの結果になっていることから考えると、それほどのコミュニケーションの機会が必要ないとも考えられる。ポイントの低い点で悪影響が出ているのならば改善を。「言語能力のある子供が伸びる」という指摘はそのとおり。図書館を「読解力向上センター」「言語能力活用センター」としての機能を持たせてはどうか。教員や大学の先生方にも協力を得て、人生観や労働観に関して、生徒が自分にとっての望ましい未来、尊敬できる人・言葉・文章・文学などを考えさせることをしてはどうか。その際、社会人と直接対話することも必要。

【平野校長】本校のベテラン教員は自律的に動いていただいているが、経験の浅い先生方にはコミュニケーションを互いに図る機会が必要。図書館については、本校の重点課題。

図書の主担当者の見える化を図るためにも、職員会議で示す資料の中にも明記ち、それなりの重みをもたせたい。

【芝井委員】学校教育自己診断結果は全体としては十分なパフォーマンスをあげている。読書活動が活性化した結果となっているが、何か行った結果か。

【平野校長】本の紹介を図書委員の生徒が書き、ニュースにして全生徒に配布し始めた。

【芝井委員】大学生にとっても読書習慣は大切であり、文系学部の学生でも読書経験が少ない。読書する機会を増やすには「しかけ」が必要で、教員が勧めるだけでなく、読書の好きな学生を図書館のボランティアにして、図書の推薦などの情報発信を試みている。読むだけでなく書くことも重要。数年前から「アカデミック ライティング」という講座を開き、毎回課題を与えて卒業論文の下書きというイメージの論文を書かせ、論理的な文章になるよう添削指導をしている。将来的には英語でも書けるようになればよい。今の学生は、受験勉強して断片的な知識があっても、自分の知識として主体的に考えたり文章化したり議論したりする力は落ちている。本を買わない。本の楽しみを知らない。高校での取り組みを期待したい。

【平野校長】文字離れというか、インターネットで手軽にいろんな情報が入り、苦しんで読み解いて知識を得るといった経験がないと思われる。専門知より集合知が幅をきかせている。時代の転換期を感じる。

【宮坂委員】わかりやすく、はやくが最近の流行でそういう文化が蔓延。難解な哲学書を理解するということがあり得ない。むしろ、そういう経験を学校でさせればよい。努力の継続とともに必要。

【山本首席】映像文化にどっぷりと浸かっている今の生徒にとって、読書そのもののハードルは結構高い。読書は読んで頭の中で映像化できるかどうか。「言葉との格闘」が不可欠。しゃれた手紙が書けないか。長文を要約するときに言葉をひねり出すような経験も必要。読書はその次の段階かもしれない。高価な本だから読むということでもない。リサイクルショップで安価で購入できる。

【澤田委員】先生方からの推薦図書をPTAで用意した。先生からのメッセージ（推薦文）付であるところが面白い。生徒の課題として取り組んではどうか。読書後、同じ本を読んだ生徒同志で気に入った言葉であるとか、感想文ではなく論文を書かせるとか、推薦した先生が添削するとかなどを考えてはどうか。

【浅田教頭】100冊ほど購入していただき、図書館機能を有した自習室にもなる書道教室に設置。今後も書籍は増やしたいが、活用が課題。

【平野校長】生徒から先生にフィードバックされる点が興味深い。

【澤田委員】読書は苦手でも、ある先生が推薦したから読んでみるという生徒もいるはず。

【浅田教頭】どんな本を推薦したかで推薦した教員がわかる。

【山本首席】感想文ではなく、同じ本を選んだ生徒同志で討論するのもよい。そのグループに推薦者の先生が入る。

【宮坂委員】その試みは、互いに読解力や表現力を高めることにつながる。

【柿原委員】社員を見ている、季節の挨拶はどこから引用できるが、後が続かない。自分でできないと思い込んでしまう。苦手だからと言って許されるという風潮がある。自分の経験では、社会に出て下手なことは言えないと思うからこそ読書もした。名言集を見れば、その背景も調べようとした。読解力は生きていく上で重要。ニュース制作に携わっていた経験から、この会議でも、誰が何を言い、どういう流れで進むかの全体像を理解して、それを1分の映像にキャプションをつけてまとめよと言われればすぐにできる。そういう自分の構想をまとめる力を身につけるためにも、先ほど議論のあった読書の感想を意見交換することは有意義。受験勉強だけでは、世間で生きていくための人間力は身につかない。人間としてどう生きるか。「学ぶ力」「生きる力」や「馬力」のようなものも必要。これらを、学校・家庭・社会が共有しなければならない。みんながするから自分もするではなく、自分としての生きざまをしっかり持ってほしい。「何のために」を絶えず意識しないと、単なる知識を豊富に持つだけに過ぎない。そのためには場数を踏むこと。私はあいさつでメモを見ないが、その場の雰囲気と与えられた時間がわかればこなすことができる。高校生が大人と話す機会が大切。家庭内での会話が大切。また、商工会議所の若手経営者塾に参加する高校生がいるが、ただ、聴講するだけではなく発言できる機会も多くなるよう促している。はじめは何も話せないが、次第に意見を言えるようになるもの。

【宮坂委員】1冊の本を分けて輪読してもよい。読んだ箇所について自分で調べて発表する。読解力は文章だけでなく、グラフや表などの資料を読み解く力も含まれると考えたい。さらにバーバル（言語的）な読解に加え、ノンバーバル（非言語的）な読解や五感を使って雰囲気を読む感受性も大切。全体が問われている。

【浅田教頭】本校の蔵書は他校に比べて多いが、ノルマとして与える読書では生徒に読書習慣は定着しないことがよくわかった。単に本を読むだけではなく、動機づけや付加価値のある読書というか、そういう工夫が必要。

【柿原委員】図書館も別のネーミングに変えてみればどうか。関西大学高槻キャンパスの図書館はソファも工夫されていて快適である。

【宮坂委員】自分が影響を受けている人の推薦する本は読んでみようと思うもの。

【澤田委員】新年度、PTA としても取り組んでいきたい。

【山本首席】書店でも「手書き」で推薦コメントが書かれている。そういう工夫も考えたいい。

【柿原委員】他人から「読んでください」と言われても、本は読めるものではない。動機づけが必要。

【澤田委員】本の冊数にも限りがあるので、読書に関わる討論に参加できない生徒に対しては、人生観について考える機会を設けることも考えられる。そのヒントとして、「槻の木カフェ」（本校主催の公開講演会）で講師の井上大阪府教育委員が、高校生に質問を投げかけておられたが、非常に効果的で、少人数であれば、に人生観について考える機会があってもよい。OB を招聘して後輩に話をしてもらうのもよい。

【平野校長】二十歳になる卒業生が集まる「二十歳の集い」の場でも、在校生への働きかけの依頼をしたいと思っている。

5. 委員よりの提言

【宮坂委員】土曜講習にのみならず、授業・課題・教材・テストのあり方・生徒が自分で学ぶ内容・自習室の活用など、すべての学習ツールを有機的にまわさないといけない。全体像を構築することにより、授業力・教材活用も向上する。これらを考える良い時期。

【芝井委員】職業観を持つことは重要だが、何になりたいよりも「何のために行うのか」を意識させてほしい。大学生の中にも「良い会社に行くために大学に来ている」と考えているものも多い。一方で「それで自分の人生はよいのか」とも思っている学生も多く、そ

の面を意識させる取り組みが必要。そういう生徒が多い学校は強い。また、言語能力が高まって、進学実績が上がっても、「何のためにしているのか」を考えさせる必要がある。受験のため・親の期待に応えるためと考えるとしまわないような配慮も必要。大学では、世界を見せて日本との落差を感じさせている。

【澤田委員】学校教育自己診断については、パーセンテージの絶対値より増減に着目して分析を。前年度だけでなく経年変化を見てもよいかもしれない。分析を踏まえて弱点の克服を。教員の人事異動は仕方がないが、T R yシステム（校長が求人情報を公開し、応募した教員から人材を確保する制度）などを活用して良い人材の確保を。

【柿原委員】先生方の入れ替わりをチャンスとしてとらえ、10年で培った榎の木カラー（ある意味では「権威」）を次の先生方に継承してほしい。榎の木の先生方は仲が良いので心配はない。高校生にとって「何のために生きるのか」を問いかけ、家庭でも会話を大切にしてほしい。